

「大学院リハビリテーション学専攻の想い」

元 西九州大学教授、姉川病院理事 山田道廣

西九州大学大学院生活支援科学研究科リハビリテーション学専攻が設立10周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。

私が西九州大学にお世話になったのは2009年から2015年の5年半です。その中で院生教育に関わったのは2011年入学の松本典久君（3期生 現武雄リハビリテーション学校教員）でした。入学当初担当教員は村田先生（現京都橘大学教授）が1年間担当されて、その後1年間小生が担当することになりました。村田先生が京都に行かれることになり、松本君は大変不安な毎日を送られたことと思ひ、ご迷惑をお掛けしたことをお許しいただきたいと思ひます。村田先生との1年間でまとめられた報告会で、これまでの研究成果を発表されるのを聞きながら、股関節開排運動に興味を持ち、これをテーマに選ばれた松本君の視点に大変興味を持ちました。しかし京都に行ってから村田先生は松本君に陰ながらその後の指導をされていたと聞いております。さすが村田先生だなと感心し、この場を借りて御礼を申し上げたいと存じます。

臨床現場では股関節開排運動は、股関節周囲筋の筋力強化として比較的良く実施する運動として、ポピュラーな動作であります。開排動作から体幹回旋動作やブリッジ動作は、理学療法士なら好んで実施するプログラムの一つである。そのような開排運動を科学的に解明して、その有効性を明らかにすることに松本君は挑戦し、その解明に大きな意味があります。臨床家としての視点で、この問題を明らかにすることで、理学療法上の意義が見いだせるのではないかと思ひます。もっと若い理学療法士がその有効性に気づき、臨床応用してくれることを期待できる内容だと思ひます。大学院でのテーマについて、やはり臨床現場からの視点で選ぶことが大切で、それを解明してさらに応用する努力が大切ではないかと思ひます。

我々理学療法士は臨床の中で患者さんに還元できるテーマを選び、その有効性を広く確認し、エビデンスに基づいた科学的なアプローチが求められる。それにより入院期間の短縮や、医療費削減効果が期待できる。超高齢社会の中で我々理学療法士に求められる現実的な指針が、今後さらに必要になると考えます。

運動学的な視点で筋活動・筋電図を使って明らかにし、股関節外転筋や回旋筋の働きが開排動作でどのように働くのかを知ることで、運動学的な個々の筋活動が明らかになり、股関節周囲筋である大腿筋膜張筋や外転筋、大殿筋などの筋活動を調査した。筋電図研究は一部のマニアックな研究者が独特な手法として用いている傾向にあり、なかなか研究現場でも応用されているとは言い難い。もっと、気軽に使って筋生理的な視点で応用されることを期待したいと思ひます。我々理学療法士には末梢効果器官としての筋肉の筋活動を調査し、その働きを運動学的な視点で解明し、より効率的な筋活動を促す動作を調査することが必要ではないかと思ひます。

そこで今回は健常者の男性を対象に選定しデータを取ろうと考えたときに、たまたま西九州大学で士会研修会が運よく開催されていて、佐賀県理学療法士会の役員が多数来ていたことから、とにかくかき集めて被験者をお願いして、自分も被験者になったこともあって対象者の平均年齢が上昇したことを記憶している。股関節開排運動ということもあって、被験者はすべて理学療法士なので理解が早く、説明もあまりせずにデータを取れたことが幸いしました。

結果的には大腿筋膜張筋、大殿筋、中殿筋は骨盤の側方安定性に寄与していること、開排動作は総合的な筋力を反映していることから、下肢筋力を表す指標として臨床応用できる可能性が示された。さらに股関節に影響する深層筋についても、検討されると浅層筋と深層筋の役割分担が明らかになるものと思われるので、今後機会があれば是非検討されるようお願いしたいと思ひます。

最終的な結論としては、虚弱高齢者や整形疾患を有する患者、中枢神経疾患を有する患者を対象を広げ、再現性や妥当性を検討したいと締めくくられました。さらに今後検討されることを期待したいと思ひます。

最近、話題になっている股関節ストレッチで股関節を軟らかくすると、若々しい身体が保てるという報告もあつ

て、話題になっていることから股関節周囲筋の筋力や関節可動域を保つことが腰痛予防などにも有効であることが知られている。今後も是非研究を継続され、後進のために臨床現場で役立つ開排動作の実施について研究を継続していただきたいと願っています。

今回、このような機会を設けて頂いた、宮原先生に深甚なる謝意を申し上げたいと存じます。